

三商レポート

第五十五話 「モモ」から学ぶ

(株) 三商 内藤 雄

明けましておめでとうございます。三商レポートをお読みいただきありがとうございます。今年もよろしく願いいたします。

ミヒヤエル・エンデ作「モモ」。時間泥棒と、盗まれた時間を人間にとりかえしてくれた女の子の不思議な物語です（岩波少年文庫・大島かおり訳 より）。

モモには素晴らしい才能があります。町のみんなは、何かことがあると「モモのところへ行ってごらん！」と言います。モモができることは、相手の話を聞くことです。モモが考えを引き出すことを言ったり質問したりしたわけではありません。ただじっと座って、注意深く聞いているだけです。その大きな黒い目はじっと見つめています。すると相手には、自分のどこにそんなものが潜んでいたかと驚くような考えが、すうっと浮かび上がってくるのです。モモに話を聞いてもらっていると、どうしてよいかわからずに思い迷っていた人は、急に自分の意思がはっきりしてきます。引っ込み思案の人には、急に目の前が開け、勇気が出てきます。不幸な人、悩みのある人には、希望と明るさがわいてきます。たとえば、こう考えている人がいたとします。おれの人生は失敗で、なんの意味もない。おれは何千万の人間の中のケチなひとりで、死んだところで何の影響もない。この人がモモのところに出かけてその考えを打ち明けたとします。するとしゃべっているうちに、不思議なことに自分が間違っていたことがわかってくるのです。いや、おれはおれなんだ。世界中の人間の中で、おれという人間はひとりしかいない。だからおれはおれなりに、この世の中で大切な者なんだ。こういうふうにモモは人の話が聞けたのです。

そんなモモに「時間貯蓄銀行の外交員」と名乗る灰色の顔の男が近づきます。時間泥棒です。モモは、その男の内心の本当の声を聞いてしまいます。

「われわれは正体かくして仕事をしなければならない。人間から生きる時間をむしりとるのだ。人間が節約した時間は人間の手には残らない。われわれが奪って貯めてこっちのために使うのだ。君達人間は自分の時間の何たるかを知らない！」

秘密を知ったモモは灰色の男達に狙われます。そこへ不思議なカメが現れモモを救います。モモはカシオペアという名のカメに連れられ、マイスター・ホラという謎の老人に会います。老人は、「私のつとめは、人間のひとりひとりに、その人の分として定められた時間を配ることなのだ。」と言います。モモはその老人に時間泥棒が人間から時間をこれ以上盗めないようにしてとたのみます。

「いや、それはできないのだ。人間は自分の時間をどうするかは自分で決めなければならないからだよ。だから盗まれないよう守ることだって、自分でやらなくてはいけない。」

モモと灰色の男達との戦いが始まりました。モモの活躍で、灰色の男達は消えてなくなり、大きな貯蔵庫から何十万、何百万という人間のいのちの時間をとりかえすことができました。

大都会では、長いこと見られなかった光景が繰り広げられるようになりました。子供たちは道路の真ん中で遊び、車で行く人は車を止めてそれをニコニコとながめ、ときには車を降りて一緒に遊びました。あちらこちらで人々は足を止めて親しげに言葉を交わします。働く人も短時間にできるだけたくさんの仕事をする必要などなくなったので、ゆったりと愛情をこめて働きます。みんなは何をするにも必要なだけ、素敵な時間を使えます。……。

幻想的でファンタジーにとんだ童話ですが、時代への鋭い風刺にあふれています。「時間がない」「暇がない」と口にする大人たち、ためになる勉強に追われ友達と楽しく遊ぶことのない子供たちに「時間」とはいったい何だろうと問いかけています。人間の心の内にある時間、人間が人間らしく生きることを可能にする時間が、この物語のテーマです。

「人の話を聞く能力」と「時間」に関する考え方は、相続の仕事にかかわる者にとっても大切なテーマです。

新たな気持ちで、人のこころ・人のいのちに関わらせていただこうと思います。

(2009年1月7日)

相続プラザ花小金井 株式会社三商 代表取締役内藤 雄

電話 042-467-2103 FAX042-467-2157

メール sansyo@trust.ocn.ne.jp URL <http://www.souzokusoudan.net>